# ＜基調報告＞生きることをえらぶ限りは


| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 明治大学日本文学研究会<br>公開日: 2024-05-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 田口,麻奈<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/0002000613 |

＊二〇二三年五月一九日（金）、東京大学駒場Ｉキャンパス一八号館（Ｚｏｏｍ併用）にて、復刻版『ぼくたちの未来のために』刊行記念シンポジウムが開催されました。本号では同シンポジウムでの各報告及び質疑応答を掲載します。なお、本誌掲載に際して登壇者及び質問者各氏によって加筆修正が施されています。（『明治大学日本文学』第四十八号編集委員会）

# 〈基調報告〉生きることをえらぶ限りは

田口麻奈

## はじめに

本日は、思っていた以上にたくさんの方にお越し頂き、たいへん嬉しく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

私からの基調報告は、復刻版の別冊解説の内容に従って進めさせていただくのですが、まず、私は今回の別冊解説に「〈ぼくたち〉、生きることをえらぶ限りは」というタイトルをつけました。このタイトルはどこから来たのか、というご質問をすでに何人かの方から頂いていますので、はじめにご説明させていただくと、これは解説の終盤（五六頁。以下、頁数の表記は別冊解説による）に引用した粂川光樹さんの評論からの引用です。

「戦没者の書「きけわだつみの声」を開くとき、生きることをえらぶ限りは、僕もまた君のように生きるしかないのだ、とこれほど痛感されるのだから。」――この言葉が、当時の、戦没者の存在と向き合いながら生きていく「ぼくたち」の共同性について考えるとき、たいへん示唆的だと思ったのです。もちろん、この評論自体も迷いに満ちた筆致で書かれていますし、決して一枚岩の共同性を想定できるわけではありません。ですが、このグループをグループとして成立させた時代的な環境と条件を考え、その上で書かれた詩を受け止めることで、いまだ汲み尽くされていない当時の詩の可能性や課題を確認してゆくことが大事だと思っています。

## 詩誌の輪郭と復刻の意義

さて、この度復刻いたしましたのは、『ETWAS』『詩のつどい』『ぼくたちの未来のために』という三つの雑誌です。『ETWAS』の創刊号は残念ながら見つかっておらず、今回のセットに入っていないのですが、一九五〇年の六月から八月あたりに駒場で創刊されま

した。そしてほぼ同じメンバーを中心として「東大詩人サークル」が形成され、その機関誌として『詩のつどい』（一九五一年七月）が創刊されます。ここまでが駒場の雑誌で、このあと中心メンバーが本郷に進学してから再結成されたのが〈明日の会〉そしてその機関誌『ぼくたちの未来のために』（一九五二年一一月）ということになります。

この三つを考えるときまず重要なのは、主要メンバーの連続性です。山本恒（一九二九生・英文）、小田島雄志（一九三〇生・英文）、金子嗣郎（一九三〇生・医）、花崎皋平（一九三一生・哲学）、小海永二（一九三一生・仏文）、松川八洲雄（一九三一生・美学美術史）、入沢康夫（一九三一生・仏文）、粂川光樹（一九三二生・国文）…といった面々で、このメンバーシップが最後まで〈明日の会〉の中心にありました。このうち最初期から雑誌の編集発行を担ったのが山本恒さん。詩人として、また詩論家として一貫して誌面を牽引していったのが花崎皋平さんです。また、後に駒場の教員となる小田島雄志さんは、〈明日の会〉の立ち上げの時に花崎さんとともに求心力を発揮したお一人です。時間も限りがありますのでこのままお一人ずつ紹介していくことはできないのですが、このメンバーはすべて新制東京大学に移行してからの入学者であり、新制東大の第一世代ということになります。従って最初期ならではの学内の動静・環境を共有しているということが、重要な点になります。

当時は受験の状況も一様ではないので、入学順に並べると生年順とはまた違うことになるのですが、今のメンバーの中ではいちばん下の学年にあたるのが入沢康夫さんです。後でまた述べます通り、入沢さんあたりがメンバーシップの観点からは一つの境目になります。

それから、駒場時代には近くにいたけれども、〈明日の会〉には合流してこなかった人も多くいます。たとえば中西進さん。実は刊行後に中西先生ご本人からご教示を頂いて、「久我洋」というペンネームで『ETWAS』にお書きになっていたということが分かりました。解説ではこれは調査が及ばず、ご紹介できておりませんでした。それから大野明男さん、亀井俊介さんといったお名前も目を引くところです。

ちなみに、『詩のつどい』創刊号に関しては、ほぼ間違いなく大野明男さんのご蔵書だったものを今回の復刻に使用しています。周知のように、大野さんは学生自治会のリーダーとしてレッドパージ反対闘争を指揮したことから退学処分となるのですが、当時大量に詩をお書きになっていた形跡もあり、だからこそこの詩誌もずっとお手元にお持ちだったのだと思われます。このように今日振り返ってみて実に多士済々と申しますか、興味深い陣容です。

ただし、これらの雑誌について、これまで多くを語ってきたのは、中心になってきたメンバーではなくその後輩たち、さきほど申し上げた入沢康夫さん以後の人々でした。ちょっと先走った説明になりますが、入沢さんや岩成達也さん（一九三三生・理）といった下の学年のメンバーが〈明日の会〉を内部批判する形で立ち上げたのが、〈あもるふの会〉という新しいグループでした。この『あも

るふ』という雑誌を母胎として、六〇年代の入沢康夫の重要な詩論が展開されていくことになるので、これもまた大変重要な詩誌ではあるのですが、〈あもるふの会〉の人々の語りにおいては、〈明日の会〉はどうしても、自分たちがすでに乗り越えたもの、という位置づけになってしまいます。『あもるふ』創刊の辞を読むと、〈明日の会〉は「けっきょく詩の問題以前の思想的・生活的共感」にとどまったグループであって、「詩を社会参加の手段であると判断」してしまうような「ある性急さ、偏頗さがあった」等と述べられています。このように、〈あもるふの会〉が全面展開する前史としてのみ〈明日の会〉は語られてきたと言えます。

もちろんこういったマニフェストでは過度に思い切った物言いがされてしまうものですが、このように早々に片付けられてしまった〈明日の会〉、ひいては五〇年代詩をもう一度きちんと再検証する、そのための土俵を作るということが、今回のような復刻の意義だと思っています。

## 環境と特徴

実際に誌面をひもといてみますと、本当にさまざまな興味深い点が見つかるのですが、今回の解説で重視したのは、①一九五〇年代の学生運動との関わり、②アカデミズムとの関わり、③海外文学への関心（翻訳詩）、④反核運動への共鳴、といったポイントです。このうち④に関しては、『希望（レスポワール）』という別の雑誌との協働があったことを詳述しましたが、ここでは『希望（レスポワール）』までご紹介する余裕がありませんので、①～③のポイントを中心にお話ししたいと思います。

まず①について、やはり、戦後の学生運動の最初の高揚期のなかで活動が始められていることは重要です。一番最初の雑誌である『ETWAS』は、一九五〇年九月に駒場で決行された前期試験ボイコット闘争の渦中で出されていて、この影響で第二号の刊行が遅れたということが書かれています。これはレッドパージを阻止するための全学連の戦略としてあったわけですが、当然ながらこの戦略に乗る学生と、試験は試験として受けたい学生との間には大きな分断が生じることになります。そしておそらくそのせいなのだろうと思いますが、『ETWAS』や『詩のつどい』の誌面では、ちょっと過剰なほどに、ここは詩人たちの詩作の場であって、主義主張は問わないんだ、ということが言挙げされます。私は解説で花崎さんの言葉を引用していますが、花崎さんが書いた編集後記には「どうにかして私たちは一緒にうたいたい」という言葉がありました（一〇頁）。分断を受け入れずに、どうやって詩人同士まず同じ船に乗るか、ということが出発時からの課題としてあったことがうかがえます。

ただ、その花崎さんにしても、どんどん学生運動の中枢に入ってゆくなかで、詩論や実作の変化を見せてゆくことになります。その変化のあり方もたいへん興味深いのですが、さしあたって注目するべきは、花崎皋平における「証言としての詩」という考え方、そしてその実践でしょう。松川事件、ローゼンバーグ事件、そしてビキ

ニ事件など、当時の抵抗運動に火をつけた出来事をめぐって、花崎さんは実際に当事者や関係者に面会を求めるなどのアクションを起こしながら運動と詩作とを連動させてゆきます。

また、当時、学生運動の戦線を大きく拡大するきっかけとなった「きけわだつみのこえ」もまた、「明日の会」の成立に不可欠なものでした。これは大事な点なのでまたあとで説明します。

②のアカデミズムについては、③の外国文学への関心とも深く関わっています。メンバーの多くが高い語学力を備えた若き研究者たちでもあったということ、これも〈明日の会〉の大きな特徴のひとつです。一般的にいって五〇年代の学生運動はまだ、大学の存立基盤そのものを根幹から否定するような動きを見せないわけですが、〈明日の会〉のメンバーにおけるアカデミアとの関係性は、実にポジティブなものであったように見えます。具体的にはとりわけ外国語と外国文学を専門とする教員勢から実直に学ぼうとする姿勢が顕著であるということなのですが、たとえば駒場で『詩のつどい』を出していたときには仏文の井上究一郎助教授がサークルの顧問でした。サークル主催の研究会では、酒井善孝（英文）、島田謹二（比較、英文）、平井啓之（仏文）、富士川英郎（独文）といった東大の教養学部の基礎を築いてゆくような教員達が講演に来ています。こうした良好な関係性は各自が学部に進学してからも基本的には継続しており、〈明日の会〉発足の機縁のひとつが、英文の平井正穂助教授の授業にあったことも分かっています。

このように、制度内の学知を遮断する構えをとらなかったということが、結果として、このグループのなかから、先駆的な翻訳詩の試みを陸続と生み出すことになりました。小海永二訳のロルカ、山本恒訳のナーズム・ヒクメット、花崎皋平訳のパブロ・ネルーダ、斎藤忠利訳のラングストン・ヒューズなど、いずれも日本における紹介・受容史の観点から極めて早い時期の試みです。いわゆるポストコロニアル批評・研究の本格的な展開に何十年も先駆けて、メンバー達は各国の抵抗文学に関心を注いでいたわけです。もちろん、これらは単に教員からの示唆を受けて生み出されたものではなく、学生運動の気運によって培われた海外の抵抗詩人との連帯の意識が、外国文学を読むための蓄積ある土壌と合流したことで生み出されたと言えるのではないかと思います。

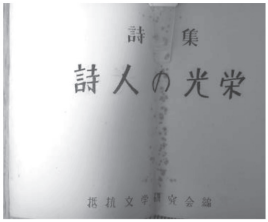
## 駒場時代、多くの同時代誌

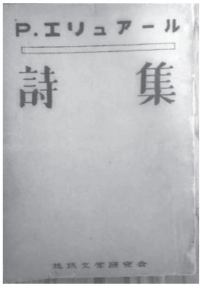
こうした環境や特徴をめぐっては、駒場時代からの連続性を押さえておくことが大事で、さきほども言及した「きけわだつみのこえ」のインパクトの大きさや、海外の抵抗詩人との連帯意識については、学内で刊行された同時代誌を横に置くとよりはっきり見えるように思います。といっても、現在確認できるのはごく一部でしかないのですが、たとえば東大民主主義文学研究会編『反戦詩集№1』や、『歌いつつ勝利へ』といった詩集を見てみると、やはり『ETWAS』や『詩のつどい』と重複する執筆者が多くいます。この『反戦詩集№1』の扉には、『きけわだつみのこえ』の序文に掲出されているのと同じ、ジャン・タルデューの「空席」という詩篇

が掲げられています。ちょっと句読点の位置などが違いますが、おおむね『きけわだつみのこえ』の渡辺一夫訳の引用であることが分かります。これは一九五〇年の映画の冒頭にも掲げられて、非常に有名になった訳です。

「死んだひとびとは還ってはこない以上、生き残ったひとびとは何が判ればいい？／死んだ人々には嘆く術もない以上、生き残ったひとびとは誰のこと、何を嘆いたらいい？／死んだひとびとは、もはや黙ってはおられぬ以上、生き残ったひとびとは沈黙を守るべきなのか？」

この「空席」の感覚、誰かがいるはずだったのにいない、という多くの人の感覚に、当時このタルデューの詩篇が輪郭を与えた、ということだと思います。ちなみに今回のシンポジウムのフライヤーも、この「空席」のイメージで、夥しい椅子が並んでいる写真を使って作りました。




タルデュー「空席」の出典は、一九四三年七月にフランスで発行された『詩人の光栄』*L'Honneur des poètes*という詩集ですが、『詩人の光栄』全体の翻訳も、東大民主主義文学研究会の内部にあったとおぼしい「抵抗文学研究会」の人々の手で、東大五月祭などで配られた形跡があります。同じように、P・エリュアールの翻訳なども学内で配布されたようです。これらの翻訳は、決して専門家の後追いではない、同時代意識に基づいてなされた若い世代による貴重な試みであり、駒場時代のこうした環境の延長線上に、〈明日の会〉の翻訳への志向性が醸成されたと言えそうです。

また、『ぼくたちの未来のために』に初出発表されたメンバー達の翻訳詩は、当時、同人誌という範疇を超えて広く発信されました。小田島雄志訳のC・D・ルイス『ナバラ』、小海永二訳のフェデリコ・ガルシア・ロルカ『月とオリーブの歌』、花崎皋平訳のシュテファン・ヘルムリン『鳩のとびたち』などは国文社のピポー叢書から刊行されています。また『イギリス解放詩集』『フランス解放詩集』など河出書房から出ていた抵抗詩集のシリーズには、主要同人のほとんどが参加しています。

さらに紹介すると、『ぼくたち…』二四号には、『きけわだつみのこえ』収載の田辺利宏の詩篇「雪の夜」の英訳も載っています。「人はのぞみを喪っても生きつづけてゆくのだ」という一節からはじまる、これもまたたいへん著名な詩です。山本恒の手によるこの

英訳は、アジア・アフリカ国際学生会議の場に携行されました。学生運動と翻訳活動が合流するようなこうした場所で、同人達は詩のことばに向き合っていたわけで、それは同時代との大事な紐帯でした。そこには、詩が社会参加の手段であるとかないとかいうのとはまた別の、創造的な開路が開いていたはずです。

## *For your tomorrow* と世代意識

さて、ここまで、〈明日の会〉が同時代の課題を深く共有し、高い語学力や環境的な条件を積極的に詩作の場に流入させながら活動していたということをお話ししてきました。ただ、同人たちの著述を特徴づけている世代的な感覚ということに関して、それだけでは説明しがたいところもあり、今回の解説を執筆しながら、最後までうまく言語化できなかったところもあります。平たく言うと、エリーティズムやナショナリズムに関する意識がどのようになっているか、ということです。

〈明日の会〉のメンバーは、同時代の多くの人がそうであったように『きけわだつみのこえ』に大きな感銘を受け、戦死者の声なき声に応答したいという思いを共有していました。しかし〈明日の会〉が本郷で結成されたときに、そこにもうひとつ別のテクストが重ね合わせられます。それがイギリスのパブリックスクールの出身者の遺稿集である *For your tomorrow* です。実は、この詩集は東大の図書館にも、国会図書館の本館にもないのですが、明大の図書館にはあって、おかげで私はとてもスムーズに読むことが出来ました。詩

（左から）山本、田口、川本、逆井、乗木

誌のタイトルである『ぼくたちの未来のために』は、直接的にはこの〈For your tomorrow（君たちの未来のために）〉という一節に応答する形でつけられたものです。これについては、小海さんや小田島さんの言及を、解説の二五頁〜二七頁あたりに引用しています。

私は当初、イギリスの戦没者の遺稿集に冠されたこの言葉を、自分たちへの呼びかけでもあると素直に思えてしまうこの感覚が、彼らの世代のある種の屈託のなさに見えていました。〈For your tomorrow〉というのは、もともとは前線で死んだ兵士が故郷にいる同胞に向かって呼びかけるという体裁のエピタフの一部であり、第二次大戦の激戦地であるコヒマの丘に立てられた記念碑に刻まれたことから現在もコヒマ・エピタフという呼称で知られています。詩集を開くと、扉の部分にもやはりコヒマの地名とともにエピタフの全文が掲げられていて、これが日本軍と戦ったイギリス軍第二師団のためのものであるという添え書きもつけられています。〝When you go home/Tell them of us and say/For your tomorrow/We gave our today.〟——逐語訳としては、「君が故郷に帰ったときは、彼らに私たちのことを伝えて言ってほしい、君たちの未来のために、私たちは今日を捧げたと」という感じになります。

言うまでもなく、本来は故郷を同じくする人同士の絆を強調するエピタフであって、さらにこれが国家のリーダーを養成するパブリックスクール出身者の遺稿集に重ねられているのだから、極めてノブリス・オブリージュ的な、強い責任感と共同体意識が示唆されることになります。それは、当時「わだつみの悲劇」という言葉で認識されていたような日本の戦没学生の像、権力の犠牲となった無垢な若者の像とはかなり異なるものであるはずです。『きけわだつみのこえ』の内容に深く心を動かされたならば、その違いはいやが上にも意識されたはずだと思うのですが、同人たちの言及を見る限り、そうした意識の屈折のようなものは読み取れません。これはやはり、彼我の隔たりを、人間的な共感、つまりヒューマニズムの感覚だけで突き抜けることができたということなのか。その場合、その部分だけ見るとかなり向日的で楽天的な感覚ということになりそうですが、当然ながら、彼らが国境も階級も意識せずに前向きなことばかり書けていたというわけではありません。詩作を見ると、彼らの兄の世代にあたる「わだつみ」世代への負い目の感覚を容易に見つけることができますし、これから生きていく世界が核の恐怖に支配されているという危機意識についても繰り返し語られています。

つまり、上の世代に守られてきた立場としての避けがたい負い目や引け目があり、核という新たな危機の認識もたしかにある一方で、それでも目の前には、個人的な日常と未来が開けてもいる。そうした観念と実体の重なり合いのなかで、「ぼくたち」という連帯感が立ち上がるところに、おそらく世代的な——世代と言っても限定的な範囲ですが、——特徴が潜んでいるのではないか、と思いました。このあたりは、もう少し詩の表現に即して迫りたかったところです。

## 被爆ナショナリズムを超えて

他方、今回の解説であらためて、詩そのものに光を当てることが出来てよかった、と思っている箇所もあり、そのひとつが『死の灰詩集』に関わるくだりです。解説では、当時の原水禁運動を支配していた反米のエートスに対する、花崎さんや粂川さんの明確な距離感について、二人の詩を読み比べながら論じました。「核実験やその主体であるアメリカに対する、被爆国民としての憤りや敵愾心の表出が目立つ同詩集のなかで、花崎・粂川ともに、そうしたナショナルな怒りに同化し得ない逡巡が見出せる」（四九頁）と指摘しておりまして、これは『死の灰詩集』の他の収録詩や、同じような趣旨で書かれた同時代の詩群とくらべて、特筆に値する特徴といえます。ここでは、花崎さんの「雨」という詩篇を、皆さまにご覧いただければと思います。

バンコック航路の船長も／灰をかぶって死んだという話／燕がとんでこなくなったという話／雨水をのんで白血球が減っちゃった人々の話／灰がザアザア降ったという／マーシャル諸島の原住民の話など／私たちは話合った／〈全く弱い者いじめだね〉と／アウグスティヌスの「自由意思論」をやっている人が言った／教授も私たちも／みんな思っているのだった／〈こんなことってあってもいいものか〉と／／ねえどうしたらいいんだろう／ぼくの大好きな人！／どうしたらよいか／りくつではわかってる／だけど　どうしたら／どうしたらいいんだろう

（花崎皋平「雨」部分）

このように詩篇「雨」は、当時の原水禁運動のなかで多用された、日本だけが唯一の被爆国であるというクリシェを周到に退け、同じ核実験の被害者である「バンコック航路の船長」や「マーシャル諸島の原住民」に思いを馳せています。そして、怒りや懲罰意識にあふれた『死の灰詩集』のなかでは全く異質な、「ぼくの大好きな人！」という呼びかけを印象的に響かせます。

私は解説の中では、このような愛ある呼びかけが、他の収録詩篇が示す敵愾心のなかで目を引く、という程度のことしか述べていないのですが、少し補足させて頂くと、これは愛の言葉であると同時に、そのあとに続く、「どうしたらいいんだろう、どうしたらいいんだろう」という深い迷いと繋がった言葉であるとも言えます。自己の内部で問いばかりが湧き上がってくる、その際に呼びかける相手が「大好きな人」であるのなら、それは神様のことだ、と考えることもできるのではないでしょうか。これも解説には書かなかったことですが、「ぼくの大好きな人！」の数行前に、「アウグスティヌスの「自由意思論」」という言葉があるのも、大変気になるところです。神が作ったこの世界になぜ悪が存在するのか、そのなかで人間の自由意思とはどう位置づけられるのか、という、この一連の議論については、私では到底その全容を追えないのですが、キリスト者として信仰という課題を抱えていた花崎さんの当時の思想的な位置取りを考える上でも、大事な詩篇であるように思います。

ところが、『死の灰詩集』の中で異彩を放つこの「雨」という詩

篇は、これまでほぼ忘れられてきました。たとえば、文芸批評家の川村湊さんは、『風を読む水に書く――マイノリティー文学論』（講談社、二〇〇〇）において、『死の灰詩集』のなかで被爆ナショナリズムに絡め取られなかった詩人はほとんど金時鐘のみ、と述べておられて、近年の研究でもこの言説が踏襲されてしまっています。在日朝鮮人である金時鐘の詩が、「ビキニの核実験場の住人に想像力を及ぼし、その人たちに共感と同情を抱いた、ほとんど唯一といっていいほどの稀少な例」なのだ、とのことですが、同じ『死の灰詩集』の中にあるはずの花崎さんの詩は、どうも論者たちの目に入ってこないようです。五〇年代詩人として、極めて複眼的なまなざしを持っていた花崎皋平の再評価も、この先、進められてゆけば、と思う次第です。

## 現代詩におけるキリスト教の文脈

最後に、今回、私がほとんど踏み込むことの出来なかった課題に触れてから、基調報告を終えたいと思います。その課題とは、同人たちの詩作環境にとって大事な条件であったはずの、キリスト教という紐帯です。この雑誌は、『詩のつどい』時代からずっと、森明を設立者とする渋谷区桜丘町の中渋谷教会を発行所としていました。中渋谷教会の当時の牧師さんは、山本茂男牧師。山本恒さんのお父さんです。山本恒さんの自宅であるところの中渋谷教会で、この雑誌は、かなり初期から最後まで発行し続けられたことになります。誌面からは見えてこないけれども、そのことが、同人たちの大事な紐帯であると同時に、多くの葛藤ももたらした可能性があります。「第二次世界大戦下における日本基督教団の責任についての告白」、いわゆる「戦責告白」と呼ばれる表明が教団から出されるのは一九六七年になってのことですが、山本恒さんにとっては、まさに自らの父親が、反省し謝罪すべき国策協力をおこなった、ということになります。このことが、当時どれだけ同人たちに意識されており、また議論されていたのか。そのあたりは、今回、まったく調査が及びませんでした。ですが、同人の多くがクリスチャンだったわけですから、本当は、学生運動やアカデミズム、詩壇といった軸に加えて、信仰という軸を立てたほうが、より正確に、彼らの置かれた環境を検証できただろうと思っております。

最後になりますが、今回の復刻は、もととなる原誌を長年大事に保管されてきた何人かの方の旧蔵書をひとつずつ呼び集めるようにしてようやく実現したものです。本日は、すでに鬼籍に入られた旧所蔵者の方々も、ここにいらっしゃるつもりで喋りました。また、この雑誌の復刻を具体化できたのは、琥珀書房の山本捷馬さんが関心を持ってくださったのはもちろんですが、この後お話しくださる川本隆史先生が、長年、これは大事な仕事ですよ、とエールを送り続けてくださったことが大変大きいです。現役の詩人である花崎さんだけでなく、実作者ではない川本先生も、戦後詩の言葉を深く血肉化してきた哲学者でいらっしゃいます。本日、お二人とご一緒にこの場に臨み、戦後詩が思想史に確実に参与してきたことを痛感します。また、翻訳という営為がいかにアクチュアルな実践である

か、この詩誌を検証してあらためて得心する思いですが、翻訳研究の第一人者でいらっしゃる井上健先生から、今回の復刻版にご推薦の辞を賜ったことも、私にとりまして大きな喜びでした。あらためまして、この度の復刻を後押ししてくださった皆さま、この場にお集まりくださった皆さまに、衷心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

※本稿は、ＰＰＴ資料を示しながらおこなった当日の基調報告を分かりやすく再構成し、若干の加筆修正を加えたものです。

※当日の会場には、登壇者を除いて二三人、Ｚｏｏｍでのご参加三〇人、計五三人の方がお越し下さいました。オンライン配信については、丹波博紀さま（大正大学専任講師）の全面的なご協力を賜ったことを記して深謝申し上げます。

※本シンポジウムの開催および内容の文字起こしに際しては、JSPS KAKENHI Grant Number JP21K12927の助成を受けています。

（たぐち　まな・明治大学文学部准教授）

## 『明治大学日本文学』第四十七号

＊二〇二三年三月刊＊

引揚げと引揚げ文学　「満州」からの引揚げを中心に　蘇　昊明
金鶴泳論　小説「錯迷」から見る国籍の変更　澤部　清
日本の首相記者会見における文体切り替えの考察　陳　慧玲　聶　王瑤
〈研究シンポジウム〉
昭和十年代の〈古典回帰〉と研究のナラティヴ　大石　紗都子　田口　麻奈　乗木　大朗
大石紗都子『堀辰雄がつなぐ文学の東西　不条理と反語的精神を追求する知性』をめぐって
印象記　木村　洸之
〈新刊紹介〉
伊藤氏貴・能地克宜編著／坂倉貴子・武井理紗・大塩香織・佐藤奈波・乗木大朗著『樋口一葉詳細年表』　木下　幸太
〈資料紹介〉
アジア・アフリカ作家会議『Afro-Asian Writings』『LOTUS』と高良留美子　竹内　栄美子
〈明治大学日本文学研究会会則〉〈投稿規定〉
〈明治大学日本文学研究会からのお知らせ〉
〈編集後記〉